

獣医アトピー・アレルギー・免疫学会主催 [開催日時：2015年8月22日(土)、23日(日)]

## 第2回サマースクール 講師およびサポーターの声

### ●講師 井上 舞 (アニコム損害保険株式会社給付管理部給付企画課長)

今回、企業で働く獣医師というテーマで参加をさせていただきました。

私自身、勤務先で獣医師免許を生かす仕事(=動物の診療)がないことで、どのように獣医師としてのアイデンティティを見出すか、歯がゆい思いをした時期もありましたが、今では自分のミッションは直接動物と触れあうことがなくても、「日本全体のどうぶつ健康を守る」ということだと信じています。そういったことが少しでも若い皆さんに感じていただければ幸いです。

また、いろんなお立場の先生方のお話を伺うことができ、私自身も勉強になりましたし、いい刺激をいただきました。

このように学問のみではなく、獣医師としての生き方という点で先輩たちのお話をじっくり伺える機会というのは大変貴重であり、今後も若い皆さんたちの気づきの場として活性化されることをお祈り申し上げます。

どうもありがとうございました。

### ●講師 橋本政敏 (大和市立病院 整形外科医師)

#### 第2回サマースクールに参加して

サマースクールで獣医学生・若手獣医師に医師の立場から話をしてほしい・・・水野拓也先生から依頼を受けたのは4月の初めでした。獣医学科を卒業してからずいぶんと年月が経ち、多くの同期生達は教わる側から教える側にシフトしていると思われれます。その一方で、医師9年目とはいえまだまだ発展途上の僕が、若手の方々に何を伝えることができるのだろうか。少々荷が重かったことは確かです。

臨床獣医師を志したものの叶わず、製薬会社の毒性研究所を経て学士編入試験で医学部に入った。そんな僕の、節目節目で自分が感じたことを正直に打ち明けることで、何かが伝わればいいなと思いました。その結果がちゃめちなプレゼンです。

開業するにも研究するにもお金が必要、そして勉強するには十分な時間と生活の安定が必要。全てが矛盾しているようにしか思えなかった僕は、獣医学科6年生の1年間だけ奨学金を出してくれるという製薬会社にあっさり就職しました。毒性研究所で働いた6年間で感じたことは、何が正しいかの基準がないままの職業研究者の集団の中に居たということです。

そんな環境の中で、イヌ・サルを扱う実験を一手に引き受けることになった僕は、せめてもの誠意として基本に則った研究という当たり前のことを遂行しました。

奇しくもITバブルがはじけて研究開発費の削減が求められ、あっという間にいくつものラボが閉鎖されていくのも目の当たりにしました。自分の選んだ道とはいえ、想像する由もない環境の変化の中で途方に暮れかけた時期もあります。ただ一つだけ言えるのは、その時その時で自分が選んだ方向性は、きっとその時点では最善の道だったんだろうなということです。

医師になってからも何科になるかを決めきれず、研修医の2年間が終わっても形成外科・整形外科・消化器外科とローテをして、ようやく整形外科に落ち着きました。そして、無駄に過ごしたようなローテ期間が、今になって役立つのを実感しています。

サマースクールで若手の方々と話して、今の学生は素晴らしいとか積極的だとか、僕は偉そうにそんな評価をできる立場じゃないんだと痛感しました。今回は講師という立場で参加しましたが、講師と参加者がほぼ対等に意見を交わせる雰囲気は、決して一方通行の講義では得られない互いに学んでいける場所の象徴に思えます。

長谷川先生の講義を聴いてから 20 年が経過し、ようやく講義の意味がわかりかけてきた僕にとって、極めて貴重な夏の終わりの一日でした。

●講師・小沼 守（大相模動物クリニック 院長）

サマースクールが、盛況のうちに終了しました。昨年同様、熱意のある学生達によって講師である私自身も大変刺激を受け、楽しい時間を共有できました。改めてご参加いただいた学生さん、講師およびサポーターの皆様、事務局の福原様に感謝申し上げます。

今回の講演は、正直かなりのプレッシャーがありました。長谷川篤彦先生や増田健一先生はじめ、獣医業界で刺激的な生き方をされている先生方と肩を並べ、特に臨床獣医師の代表としてどういった思い、生き様を伝えるべきか大変悩んでいました。私は研究など少々してはいますが、いわゆる地元の「かかりつけ医」であります。その臨床獣医師としてあまり社会貢献が出来ていないのではないかと日々模索しており、その中で少しでも社会貢献となる様、もがき苦しみながら無駄かもしれない悪足掻きの活動、生き様について話をさせていただきました。私の講演で参加された学生さんが小動物臨床獣医師という仕事に対して、どのように感じ、どのようにとらえていただいたか不安ではありますが、とらえ方は生き方や育った環境が違うのでそれぞれで良いと思いますし、少しでもこれからのヒントになり、自分を問う場になっていたらうれしいです。

臨床獣医師は、取り組み方で人のために役に立ち、社会貢献のできる仕事となり、やりがい、生き甲斐となる職業であることは断言できます。臨床獣医師に興味のある方はぜひ飛び込んで来てください。ただし今回コミュニケーション能力がないから臨床は断念する、と考える学生さんがいるとお聞きしました。真のコミュニケーション能力は、話上手な社交性ではなく、相手の気持ちや場の空気、先を読みとる力、そして自己責任が持てる能力であります。獣医師は命を預かる重い責任と義務を背負う職業でありますのが、最も重要なのは動物や飼い主さんを助けたいという思い、姿勢となる人間性です。その人間性が備わっていれば必ず伝わりますので今から心配する必要はありません。挑戦する前に逃げてはいけませんし、失敗しても自分で決めたことなら悔いはありません。信じてあげられるのは自分だけですから自分を信じてさまざまなことに挑戦してみてください。ご参加された学生さんをこれからもひとりの獣医師としてずっと応援してまいります。

●講師 増田健一（動物アレルギー検査株式会社 代表取締役）

昨年に続き今回も講師を務めさせていただいた。テーマは昨年の「研究者とは」に続き、今回は「ホンモノの研究とニセモノの研究」についてであって、私がこれまでの経験で培った考え方を若い人たちに提供した。簡単にまとめると次のようなメッセージである。

自身の経験を振りかえっても、獣医学の研究ではどのような研究をしていけばよいのか迷うことが多い。そもそも研究は自分自身の興味に純粋にしたがってそのテーマを選んで構わない。しかし問題は、我々が研究を行う環境が社会情勢や経済状況を完全に無視して成立しないことにある。

とくに実学としての臨床獣医学が抱える本質的な問題は、その恩恵を受ける対象が動物で、研究資金や診療費用を出す側が人間というように、短絡的な観点では損得の辻褄がなかなか合わない点にある。したがって、どうやってこのアンバランス感を是正していくかが、我々の業界の中で研究テーマを決める上で最も重要になっていく。そして、そのちょうど良いバランスを見つける際には、獣医学とは何の為にあるのか、獣医師とはどういうことを基本とした国家資格なのか、これら 2 点を我々が直視しておかねばならない。この獣医学と獣医師国家資格の存在意義をしっかりと捉えた研究をやったとき、その研究は獣医学分野で「ホンモノ」とされる。

一方、ニセモノと評される研究とは、自身の出世のための業績稼ぎの研究である。一見、研究を活発に行っているように見えても、その裏に研究者の自己保身が見え隠れしてしまっているようでは話にならない。そんな社

会や経済と隔離した独善的な研究は、税金を使わずに自分自身の資金で行うべきである。

サマースクールに参加する学生数は限られており、私が思うメッセージを発信できる機会も非常に限られているが、彼らの中には将来、研究者として生きる人もいるだろうから、このような機会に今後も少しずつであるが、そんな情報や意見を発信していきたい。次の世代がホンモノとニセモノの研究の境界線をしっかりと認識することによって、我々の業界がさらなる発展を遂げてほしいと心から願って止まない。

#### ●司会 久山昌之（久山獣医科病院 院長）

昨年は講師として、そして今年は司会進行として参加させていただきました。昨年の参加者の方たちの感想や自分の手応えから、総じて評価は高かったとひとまず納得しておりましたが、今年は、学生の方の申し込みが昨年に比べて少なく、我々の問題なのか、参加者との意識の差なのか、悩むこともありました。事前の打ち合わせでは、我々らしく信念のまま姿勢は崩さずぶれずに臨むことを確認し、講演内容や講師も変わりながら、一貫したテーマは不変であると確信しました。

が、当日も正直不安な気持ちを抱えて迎えました。結果的には、今年もさらに熱く、さらに真摯に、さらに楽しく盛況な会となりました。そして今年も、自分が学ぶことも多く、自分を見つめなおす機会となりました。

私の感じた会の感想は、昨年と同様ふつつつと熱い想いが沸き起こる会であったということ、これに尽きます。この皆の想いが、一つでも、あるいは小さくても参加した方たちの心に響くことができれば、爪跡を残せば、糧となれば、この会の意義は十分あるのではないかと思います。そのほかの感想は昨年の感想文をご参照ください（手抜きではなく、本当に同じ想いを感じました）。

褒めるばかりではいけないので、少々苦言を。多くの方が発言をする際に、ご自身の学年や専攻、地域、志望分野、経験などをまず初めに自分の条件としてお話しされる方が多く見受けられました。例えば、「まだ〇年生なので」や「研究室が臨床系ではないので」など、これはどのように聞いてもその後のご自身の発言に対する防御、あるいは言い訳、逃げの言葉に聞こえます。今のご自身が思うこと、考えることを述べるのに、そのような言葉はむしろマイナスであり、勇気が見受けられません。

また、日常からご自身の考えや意見、疑問などを常に考え、議論、あるいはそこまでいかなくとも意見の交換などは積極的に行うべきです。コミュニケーション能力を養うだけでなく、いろいろな方向からものを見ること、深く考えること、相手を理解し思いやることなどたくさんの良い結果が得られると思います。場合によっては普段思いつかない自分に気づくチャンスにもなります。

そのような場合、ご自身の発した言葉や記した文章は、発せられた瞬間に相手のものとなり、相手の解釈によって自分の想いが届かなかったり、間違っって伝わってしまうことがあります。ですが、発した言葉は独り歩きをし、すでに取り返しはつかない状況であることが多くなります。ご自身の考えを述べる際には、あるいは単純に言葉を発するときには、必ず頭の中で一度再考し、自分が発するに値することであるか、あるいは正しいのか、表現は間違っていないか、どうすれば正しく伝えることができるのか、よく考えてみてください。言葉は「言霊」です。

さらに、相手に伝えるには、適切な言葉や言い回しを知らなければいけません。皆さんの発言を聞いていると、せっかく良いお考えをお持ちなのに表現しきれない方が多いと感じました。想いや意見を伝えるには、相手をしっかりとみて、感じて、そして豊富な語彙や表現法を持たなければいけません。

獣医師として何ができるか、これはまだ私にも答えは出ておらず、毎日苦闘しています。ただ、はっきり言えるのは、獣医師という仕事が好きであること、好きであればどんなことでもできること、そしてそれに付随する努力や苦労は、決して辛い、むしろ楽しめるものであるということです。好きという想いがあれば、あとは勇気と信念で、すべてを乗り越えるものと信じています。

まずは、人としての地力＝人間力をつけること、これは獣医師としての勉強や研究、大学での教育だけでは到底成り立ちません。普段の生活から、いつもの思考から、自分の意識から考えなければいけません。そして、家族や友人、先輩、教官などとの人の交流から、遊びや趣味から、学校行事や団体活動から、アルバイトやボランティアから、歴史や書籍から、たくさんの経験と知恵を身につけなければいけません。

その自分の土台の上に、まずは獣医師としての最低限の力量を得て、初めて自分の望む獣医師を目指すことができます。先は長く目指す領域は高いでしょう、でも好きなら、想いを持っているなら、必ずできます。

●サポーター 上田一徳（横浜山手犬猫医療センター 院長）

この度はコーディネーター誠にありがとうございました。参加した感想をメール返信で申し訳ございませんが、記述させていただきます。

昨年と同様に、普段会えない方との交流ができたことが何よりでございます。夏という季節が、ちょうど自分自身の平素の LIFE STYLE のブラッシュアップに最適でした。普段の生活を見つめ直し、これからまた1年、どのように過ごすべきかとじっくり考えさせられました。長谷川先生、増田先生から、昨年も教えていただいた獣医師としての精神が非常に役立っております。教育、臨床、情報整理のどれも欠かせないはずなのに、ただただ現場をこなすだけで終わっているように思えます。がむしゃらに働くだけでなく、前後の見直しが本当に大切であることを再認識しました。今回も、企業の方や学生の方々という、私が平素あまり交流の無い人とお話出来たことは非常に有意義でした。特に学生の方との交流は、自分の原点に戻れるいい機会であります。来年も第3回が開催されれば是非とも参加させていただきたいです。三浦のマホロバもとてもいい環境でした。反省点としては、自分のことばかり考えてしまい、全然学生の人たちに自分ができることを提供できませんでした。来年はもっと大人になってスクールに貢献していきたいと思っております。今後ともよろしく願いいたします。

●サポーター 豊田 陽一（株式会社 VDT 代表取締役社長）

サマースクールに参加させて頂きました株式会社 VDT の豊田と申します。参加する前はアトピーやアレルギーといった一部の話、徹底して取り上げるものだと思っておりました。しかし、実際参加してみると私の予想は見事に裏切られました。アトピーやアレルギーの話から始まったサマースクールでしたが、「学生」「企業人」「研究者」「臨床家」によって巻き起こされた熱気が参加者全てを刺激し、「研究とは何か」「獣医師としての使命は何か」「今の社会に何が必要か」といった大きな議論へと発展していきました。私自身も、自分の将来、獣医業界の未来を真剣に考える素晴らしい機会となりました。自分に何が出来るのか、ここにいるメンバーとならば何が出来るのか、を今後も考えていきたいと思っております。稚拙な文章で恐縮ではございますが、上記感想をご査収頂ければ幸甚に存じます。今後もまた参加させて頂きたいと考えております。貴学会の益々のご発展を心よりお祈り申し上げます。

●サポーター 工藤 直（犬と猫の病院 ぴーす 院長）

懇親会では、去年とは違い、サポーター同士で話し込んでしまうことが少なかったように感じました。

ディスカッションでは、全員の考えが似ているのか、流れと外れた意見を出しづらかったのかはわかりませんが、良くも悪くも“まとまっていた”と思っております。司会をさせていただきましたが、参加者の意見がもっと聞き出せるような質問ができれば良かったと思っております。また、司会⇄参加者・会場⇄参加者ではなく、参加者⇄参加者の形式を作ることがベストだったのだと思っております。第1グループでの流れを最後まで引きずってしまったと感じています。参加者の発言を聞いていて、言葉の選び方が良くないと思っておりました。布村先生がおっしゃっていた『“獣医”ではなく“獣医師”』ということをお初めとして、間違った表現や畏まった場面では使用しないよう

な口語が多く聞かれました。普段の生活で使用することは問題ないと思いますが使い分ける能力は必要なので、一つひとつ注意していけば良かったです（実際は自分で気づいて直していくことですが、おそらく今までそういう機会がなかったから直っていないはずなので、獣医師以前に一人の大人として伝えていくべきことだったと思っています）。また、『まだ〇年生なので～』や『～だと思っていたので～』など、プログラム中は自分の意見を守る表現は禁止にした方が良くと思います。

遅刻でプログラムの初めから参加できず、残念でしたが、去年に引き続き、今年もたくさんの方々から刺激を受けて帰ってきました。正しい道を示すことができるように・正しく伝えられるように、常に研鑽していきます。

ありがとうございました。